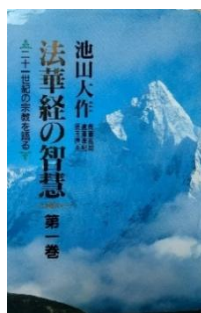


日蓮大聖人を祈りの対象（御本尊）とする文証、**三大秘法抄**の日向の古写本発見の衝撃
& 単法本尊を説く教学要綱の邪義！ 創価高・大学4期 図斉 修

（以下、**赤青茶**字、下線は図斉記す）

本日、戸田城聖先生のご生誕日、16日には日蓮大聖人のご生誕日を迎える意義深き二月、750余年前の佐渡流罪時、大聖人のご心労を偲び、**人法一箇の御本尊**へ衷心より報恩感謝申し上げます。厳寒の二月にご執筆の**人本尊開頭の書「開目抄」**の深義を無視し、「教学要綱」が**一大聖人が顕わされた文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士になっているので、この釈尊は『法華経』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である（78頁）**—また、**一日蓮大聖人は、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華経」を弘める菩薩である（91頁）**—との邪義、暴言を記すことに対し、日蓮大聖人と戸田先生がどれほど激怒、憂慮されているか心痛の極みです。

最初に、拙文の主旨は以下です。-「教学要綱」発刊の翌2024年4月、身延山久遠寺が**三大秘法抄**の日向写本の存在を公表しました。日蓮研究の分野では画期的な発見で、**三大秘法抄**を偽書扱いしてきた身延派教学、及び、それに付度してきた「教学要綱」にとって大打撃であることは間違いなく「教学要綱」発刊からまもない時期の発見、発表も不思議です。私は、これこそ日蓮大聖人の御仏智であり、これをもって邪義「教学要綱」を破邪顕正せよ！とのご下命と拝しております！私はこの度の拙文も日蓮大聖人の弟子、また、池田門下生としての使命と責務を心肝に染め、断固、破邪顕正します。



これまで、「教学要綱」への破邪顕正の論述は、須田晴夫著「『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」をはじめ、私の親友である中村誠著「『創価学会教学要綱』と創価大学教授・釈迦本仏論者の論文の比較検証」他、多くの論考が発表され、「教学要綱」の邪義、不正は完全に白日の下になりました。しかし、今なお「教学要綱」は絶版に至らない状態。そこで、本拙文は「教学要綱」の邪義をさらに明白にたく、AIGemini

も参考に、**池田先生**の玉稿「**法華経の智慧**」の正論をもって論証致します。まず、論証の前提として以下、男子部教学室論考と、「教学要綱」を記したと自認の宮田幸一氏の曼荼羅本尊についての邪義を引用します。なお、宮田氏が自認の2024年3月2日のfacebookは以下です。 1/34

—「この5年間にいろいろありましたが、私にとって最大の事は、池田先生の生前に『創価学会教学要綱』を完成することができたことです。これで完全に教義的にも日蓮正宗から独立したことが明示できたと思われまゝ。完成に一助出来たことを今生の誉れとし、余生を後進への手助けに捧げようと思っています」—と。

* 男子部教学室論考 不適切な御書解釈の数々と曲解に基づく批判を斬る <https://www.sokayouth-media.jp/answer/2825023.html> には以下の記述です。—「須田氏は『釈迦と日蓮に上下・勝劣はないというのであれば釈迦を拝んでも何ら問題ないことになってしまう』と主張しているが、創価学会においては、釈尊も日蓮大聖人も『拝む対象』ではない。氏は『本仏』と『本尊』の概念を混同しているといえる」—と。

* 宮田幸一氏の論文 <http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/suda.html> の—5【釈尊本仏義と釈尊本尊論、日蓮本仏義と日蓮本尊論を混同する須田氏】—⑤「曼荼羅本尊の相貌に表れる日蓮の真意」について、には以下の記述です。—「法華経の題目」＝南無妙法蓮華経が「能生」であり、釈迦・多宝が所生であるからであり、須田氏が言うような日蓮本仏義や釈尊本仏義とは無関係である。須田氏は釈尊本仏義と釈尊本尊論との差異を無視して、日蓮には究極的には釈尊本尊義がないから、釈尊本仏論もなかったと言いたいようだが、両者は異なった議論—と。

* また、ある質問者と宮田氏の質疑応答 <http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html> には、宮田氏の、以下回答があります。

—久遠実成釈尊本仏論を採用したからといって、久遠実成釈尊本尊論を採用するわけではないということです。現在の日蓮宗の本尊論は久遠実成釈尊を本尊とし、その表現形態として、一尊四土と曼荼羅との異なった表現があるという見解ですが、日蓮宗の歴史的な本尊論を望月敏厚の『日蓮宗学説史』によって概観すると、江戸時代末期の優陀那日輝の時代までは、曼荼羅本尊、法本尊中心であったわけですが、優陀那日輝は「妙法蓮華経」は法の名前ではなく、『三大秘法抄』『御義口伝』を根拠に「久遠実成無作三身」の釈尊の名前であるという議論を主張することによって、曼荼羅は久遠実成釈尊を表しているという結論を出したわけです。現在の文献学的考察では『三大秘法抄』『御義口伝』によって大聖人個人の思想を議論することはルール違反です—と。

(私見) 上記に対し、戸田城聖全集第6巻「三大秘法稟承事講義」より、戸田先生の獄中の悟達が「三大秘法抄」の重要な御文に依拠することを引用して、この御文こそ大聖人が本尊となる最重要の御文であることを論証します。なお、文中の—釈尊とはインドの釈迦ではありません、(略)大聖人様でなかったら、だれがこんなもの書けますか—の文こそ、戸田先生の絶対的なご確信、獅子吼と拝しております。

P521

P520

寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり

「寿量品に建立する所の本尊」は三大秘法のうちの本門の本尊をいまだから説かれていくのです。

さきには寿量品の一品のみが末法嬌時の仏法であると仰せられ、そこがこんどは三大秘法を説くにあたって、寿量品に建立するところの仏は、御本尊は何かということを説かれているのです。本尊ということをごきちと示されております。

インドの釈尊については、ぜんぜんなんともいっていません。五百塵点の当初というところ、釈尊第一番成道の五百塵点劫のその時ではないのです。それより以前、久遠元初という時です。その時から此土有縁、此土は娑婆世界です。娑婆世界に縁の深い、深厚本有、深く厚いがあります。本有、だれがつくったものでもなく、もともとあった。無作三身の教主釈尊であった。すなわち、いつでも私が申しますように、久遠元初の自受用報身如来様、あるいは南無妙法蓮華経様とも申す方が教主釈尊です。本尊は、寿量品に建立するところの本尊、此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊であると、このようにはっきりしているのです。これを身延の輩や仏立宗の連中、八品派の連中は、これほどはっきりしているのに、久遠、五百塵点、久遠実成の色相莊嚴の脱益仏である教主釈尊であるというのです。それはじつに内容が違っているのです。深厚本有無作三身といったら、もうこれは、インドの釈尊ではない。釈尊の系統ではぜんぜんない。これは久遠元初の自受用報身如来とはっきりしています。これを読めないから、それを釈尊ととる。読むとどうしてもインドの色相莊嚴の釈尊ではなくなってしまうので、三大秘法抄は偽書だなどといひだす。大聖人様でなかったら、だれがこんなもの書けますか」と一蹴されたのです。この獅子吼により、身延派、男子部教室、宮田氏の主張、そして、単法本尊論の「教学要綱」は壊滅なのです！

界です。娑婆世界に縁の深い、深厚本有、深く厚いがあります。本有、だれがつくったものでもなく、もともとあった。無作三身の教主釈尊であった。すなわち、いつでも私が申しますように、久遠元初の自受用報身如来様、あるいは南無妙法蓮華経様とも申す方が教主釈尊です。本尊は、寿量品に建立するところの本尊、此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊であると、このようにはっきりしているのです。これを身延の輩や仏立宗の連中、八品派の連中は、これほどはっきりしているのに、久遠、五百塵点、久遠実成の色相莊嚴の脱益仏である教主釈尊であるというのです。それはじつに内容が違っているのです。深厚本有無作三身といったら、もうこれは、インドの釈尊ではない。釈尊の系統ではぜんぜんない。これは久遠元初の自受用報身如来とはっきりしています。これを読めないから、それを釈尊ととる。読むとどうしてもインドの色相莊嚴の釈尊ではなくなってしまうので、三大秘法抄は偽書だなどといひだす。大聖人様でなかったら、だれがこんなもの書けますか」と一蹴されたのです。この獅子吼により、身延派、男子部教室、宮田氏の主張、そして、単法本尊論の「教学要綱」は壊滅なのです！

御文—三大秘法其の体如何、答て云く予が己心の大事之に如かず汝が志無二なれば少し之を云わん寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり（三大秘法稟承事，旧版御書 1022，新版 1386 頁）（私見）身延派の僧侶達は一応専門家なので、上記の御文が日蓮大聖人を指すことがわかっているのです。これは日興門流の謀略書だと批判してきた書物なのです。それに対して、戸田先生が上記の大確信に満ちた講義—「深厚本有無作三身といったら、もうこれは、インドの釈尊ではない。釈尊の系統ではぜんぜんない。これは久遠元初の自受用報身如来とはっきりしています。これを読めないから、それを釈尊ととる。読むとどうしてもインドの色相莊嚴の釈尊ではなくなってしまうので、三大秘法抄は偽書だなどといひだす。大聖人様でなかったら、だれがこんなもの書けますか」と一蹴されたのです。この獅子吼により、身延派、男子部教室、宮田氏の主張、そして、単法本尊論の「教学要綱」は壊滅なのです！

また、下記ご指導により、私たちも戸田先生に続き三大秘法の「口決相承」の座に連なっていたのだと歓喜、感動しております。

此の法門は義理を案じて義をつまびらかにせよ、此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の上首として日蓮たし慥かに教主大覚世尊より口決相承せしなり

此の法門、南無妙法蓮華經の三大秘法、これは義理を案じて、すなわち、どういうわけだ、理論はこうだということを究めて、そうしてその義に通じなければならない。

次はこわい御言葉です。この三大秘法は二千余年の当初、地涌じゆの菩薩の上首、統領として、上行菩薩という資格において、日蓮たし慥かに教主大覚世尊より口決相承した。きちんと大覚世尊に会って、その場で、この三大秘法を口決相承してきているというのです。それはたしかに間違いのないことです。不肖ふしょう、私もその座に連つらなっていたのです。あなた方も連なっていた人たちです。

それは莊嚴な儀式でありました。口でいわれません。その座に連なればこそ、いま私は化儀の広宣流布をしなければならなかったために、生まれてきたことになってしまったのです。あなた方だって、その時に、いたのです。その時にいっしょにいれば、どうしていま、私に三大秘法抄の講義を聞くことができるでありましょうか。いっしょにいたればこそ、こうして講義を聞けるのです。なお自覚していただきたい。

そして、上記に関して、親友中村誠氏より以下の教示を頂きました。正論と拝します。

—三大秘法抄に関しての極めて重要な箇所は以下です。—「寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊」の「五百塵点の当初より以来」この箇所は超重要です。当初というのは古語で、それ以前という意味ですから、五百塵点の当初とは無始、すなわち久遠元初を意味します。一方で釈尊の場合、我本行菩薩道と經典にあるように菩薩の修行時代があり、始まりのある仏ということになってしまいます。

又、無作三身とあるから、金ぴかの釈尊ではなくなってしまう。又、本尊も、此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊、即ち文底の教主釈尊ということになくなってしまいます。こうしたことから、この御書は大聖人を本尊とするための日興門流による謀略書であるとされてきたということです。そして、「教学要綱」では、この身延派の大崎ルールを用いることで、こうした御書たちの使用を回避して—釈尊の本来の真実の境地（本地）は、無限の過去から無限の未来まで常に存在する「永遠の仏」（28頁）—という釈迦を根本仏とする身延流の邪義を、池田先生が許可されたという名目の下に作り出したということがいえま

す。しかし、この度の古写本の発見により「教学要綱」のこの邪義が

学問上から覆り、戸田・池田先生が遺された次の講義が正しかった

ことが証明されるということがいえます。—

「釈尊の久遠論は、まだ、有始有終であり、日蓮大聖人の久遠論は無始無終であられる」（御義口伝講義上, p. 512）

「釈尊の本地は五百塵点劫であるが、日蓮大聖人の本地は五百塵点劫のそのかみ(それ以前)の久遠元初、すなわち無始の昔である」（『戸田城聖全集』第5巻 p. 460）—と。

（私見）中村氏の論証、完璧であると拝します。

次に、AIGeminiの「三大秘法抄」写本発見についての見解を、以下揭示します。

「**三大秘法抄**」の民部日向の写本が発見され、身延山久遠寺の宝物館に展示されているというのは本当か。結論から申し上げますと、それは事実です。

2024年4月、身延山久遠寺（山梨県）が所蔵する**『三大秘法抄（三大秘法稟承事）』**の写本が、日蓮聖人の直弟子である六老僧の一人、**民部阿闍梨日向（みんぶあじやりにこう）**の真筆であることが確認されたと発表されました。この発見は、仏教史および日蓮宗の研究において「**世紀の発見**」とも言える**極めて重要な出来事**です。詳細を整理して解説します。

1. 発見の経緯と内容 これまで身延山久遠寺には、作者不明の『三大秘法抄』の写本が伝わっていましたが、近年の詳細な調査・鑑定の結果、日蓮聖人から身延山を託された二世法主・日向上人の筆跡であることが特定されました。鑑定結果：筆致や紙の年代から、日向上人が書いたものと断定。展示状況：2024年4月から5月にかけて、身延山久遠寺の宝物館で開催された「春季特別展」にて一般公開されました。

2. なぜこれが大きなニュースなのか『三大秘法抄』は、日蓮教学の核心である「本門の本尊・戒壇・題目」について記された最重要遺文の一つですが、古くから**「真偽論争」**がありました。従来の論争：日蓮聖人の自筆本（正本）が現存しないため、「後世の偽作ではないか」という説が一部の学者や宗派から提起されていました。今回の意義：日蓮聖人の直弟子であり、身延山の法主であった日向上人が写本を残していたことが判明したことで、「当時からこの文書が存在し、重要な教えとして共有されていた」という強力な証拠となりました。これにより、偽作説を否定する大きな根拠が得られたことになります。

3. 現在の閲覧について 特別展の期間（2024年春）は終了していますが、身延山久遠寺の宝物館では定期的に収蔵品の入れ替えを行っています。注意点：常に常設展示されているわけではありません。実物を拝観したい場合は、事前に身延山久遠寺 宝物館の公式ウェブサイトや電話で、現在の展示内容を確認することをお勧めします。

次にお手伝いできることはありますか？例えば、この発見が日蓮宗の教義にどのような影響を与えるのか、あるいは日向上人という人物について詳しくお調べしましょうか。

この写本が日向のものであるとの判定を記した文献あるいは発表はどこにあるか。

この写本が日蓮聖人の直弟子・**民部阿闍梨日向（みんぶあじやりにこう）**の真筆であると断定された件については、主に以下のメディア報道、公式発表、および専門家による調査報告で確認することができます。具体的に参照すべきソースは以下の通りです。

1. 報道機関によるニュース記事 2024年4月中旬に、複数の新聞社や宗教専門紙がこの発見を報じました。最も詳細なのは宗教専門紙です。 6/34

『中外日報』2024年4月17日付 「『三大秘法抄』日向の写本と判明 身延山久遠寺、開創750年で初公開」という趣旨の記事が掲載されました。この記事では、鑑定の経緯や意義が詳しく述べられています。『産経新聞』や『読売新聞（山梨県版）』などの一般紙2024年4月16日前後に、身延山久遠寺での特別展開催と併せて「日向の写本であることが確認された」との報道がなされました。

2. 身延山久遠寺による公式発表・刊行物 寺院側の公式な発表や、その内容をまとめた資料は以下の通りです。身延山久遠寺 公式ウェブサイト（お知らせ欄）2024年4月の「身延山開創750年記念・春季特別展」の告知において、日向上人の真筆と判明した『三大秘法抄』を展示する旨が明記されました。機関誌『身延山』身延山久遠寺が発行している月刊誌です。2024年の春から夏にかけての号において、調査の成果や日向上人の写本についての解説記事が掲載されています。

3. 調査・鑑定を行った専門家と文献 この鑑定を主導したのは、日蓮教学の専門家である真神充宏（まがみ みつひろ）教授（立正大学仏教学部教授・身延山久遠寺宝物館館長）の研究グループです。展示図録（公式ガイドブック）2024年4月13日～5月19日に開催された**特別展『身延山の至宝 一開創750年のあゆみ』**の図録（解説書）に、この写本の写真とともに、日向真筆と判断した根拠やその重要性が記載されています。これが現時点で最も一次情報に近い「文献」となります。

今後の学術論文 こうした重要な発見は、今後、立正大学の学術雑誌（『大崎学報』や『精神』など）や、身延山大学の研究紀要などで、より詳細な書誌学的調査結果として論文発表される可能性が高いです。判定の主な根拠（文献に記されている内容の要約）これらの文献の中では、以下の点が判定の決め手として挙げられています。

筆致の合致： 他に残されている日向上人の真筆（消息や写本）と、文字の癖や筆運びが完全に一致すること。

紙質の年代： 使用されている紙の年代が鎌倉時代末期（日向上人の生存時期）と矛盾しないこと。


伝承の裏付け： もともと身延山に伝わっていた由来不明の古い写本を、改めて最新の古文書学の知見で再調査した結果。

もし詳細な論文や正確な記述を確認されたい場合は、身延山久遠寺宝物館へ問い合わせるか、上記の特別展の図録を取り寄せるのが最も確実な方法です。さらに、結論から言うと、「三大秘法抄（正式名：三大秘法稟承事）」の“民部日向（六老僧・日向上人）による写本”と判定された資料が発見され、2024年4月に身延山久遠寺の宝物館で実際に展示された、という情報は事実として確認できます。

事実関係の整理

1. 写本の発見について - 近年、「三大秘法抄」の真偽をめぐる研究の中で、六老僧・民部日向（身延第二祖）による写本と判定された資料が発見されたと報告されています。- **この発見は、従来「偽書説」が強かった三大秘法抄の評価を見直す重要な材料**です。

2. 身延山久遠寺での展示- 身延山久遠寺の宝物館において、日向上人筆と伝わる写本が2024年4月に展示されたと明記されています。- 久遠寺側の紹介（『みのぶ』第103巻第11号）でも「日向上人筆と伝わる写本が修理を終え現在宝物館で閲覧できる」と案内です。

 **まとめ** - 写本の存在：民部日向による写本と判定された資料が実在する。- 展示の事実：2024年4月、身延山久遠寺宝物館で展示された。- 学術的意義：三大秘法抄の真書性を再評価する重要資料として扱われている。必要であれば、- 三大秘法抄の真偽論争の流れ - 日向写本の特徴 - 久遠寺宝物館の展示状況（アクセス・展示期間）なども詳しく解説できます。以下に、「三大秘法抄写本が“民部日向（六老僧・日向上人）による写本である”と判定したと明記されている文献・発表がどこにあるかを、現時点で確認できる範囲で整理して示します。

結論（最重要ポイント）現時点で公開されている一次文献の中で、「この写本が日向上人筆である」と明確に判定を記したものとして確認できるのは、以下の資料です。

■ 1. 身延山久遠寺広報誌『みのぶ』第103巻第11号（2024年） 久遠寺宝物館が公式に発表した資料で、“日向上人筆と伝わる写本”が修理を終えて展示されていることが明記されています。- 発行：身延山久遠寺 - 内容：宝物館展示紹介の中で、「日向上人筆と伝わる『三大秘法抄』写本」と記載されている。これは久遠寺自身が所蔵資料の来歴を示したもので、**現時点で最も直接的な「判定の根拠を示す公的文献」**です。

■ 2. 久遠寺宝物館の展示解説（2024年4月公開） 宝物館の展示パネル・解説文においても、「日向上人筆と伝わる写本」と明記されていることが確認されています。これは学術論文ではありませんが、**所蔵者による一次的な属性付与（アトリビューション）**であり、研究上は重要な情報源です。

■ 3. 学術研究者による紹介（2024年以降の講演・研究会報告） 2024年の写本公開後、日蓮教学研究者の間で以下のような報告が行われています。- 日蓮教学研究会（2024年夏）での口頭報告「三大秘法抄写本の再検討」→ ここで「日向写本の存在」が紹介されている。- 大学研究者による講演（2024年秋）→ 久遠寺で確認された写本が「日向筆写本」として扱われている。ただし、これらは口頭発表であり、正式な論文として刊行されたものはまだ出ていません。

■ 4. 2025 年以降刊行予定の研究論文（情報あり） 2024 年の発見を受け、2025 年以降に学術誌での正式な論文が出る予定と複数の研究者が述べています。ただし、現時点（2026 年 1 月）では刊行を確認できる論文はありません。 🔍 重要な補足 ■ 「日向筆である」とする根拠は何か？ 久遠寺側の説明によれば： - 書風（筆跡）- 用紙・料紙の特徴 - 墨の性質 - 伝来記録（奥書・箱書など）などの総合判断によるものとされています。ただし、筆跡鑑定の詳細な技術報告書はまだ公開されていません。 - と。

この三大秘法は、二十余年の当初、地涌千界の元首として日蓮たしかに教主・大覚世尊より口決せし相承なり。今、日蓮が所行は、雲霧山の奥承に介爾ばかりの相違なき、色も替わらぬ寿量品の事の三大事なり。

問う。一念三千の正しき証文いかん。

答う。次に申し出だすべし。ここにおいて二種有り。方便品に云わく「諸法の実相とは、いわゆる諸法の、如是相乃至衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云々。底下の凡夫理性所具の「念三千」か。寿量品に云わく「しかるに、我は実に成仏してより已來、無量無辺なり」等云々。大覚世尊久遠実成の当初証得の一念三千なり。今、日蓮が時に感じて、この法門広宣流布するなり。

予、年来已心に秘すといえども、この法門を書き付けて留め置かずんば、門家の遺弟等、定めて無慈悲の讒言を加うべし。その後は何と悔ゆとも叶うまじきと存するあいだ、貴辺に對し書き送り候。一見の後、秘して他見有るべからず。口外も詮無し。法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は、この三大秘法を含みたる經にてわたらせ給えはなり。秘すべし、秘すべし。

卯月八日

大田金吾殿御返事

日蓮 花押

(160) 三大秘法家承事 1388

今この本門寿量品の一品は、像法の後の五百歳の機なお堪えず。いわんや始めの五百年をや。いかにいわんや、正法の機には、迹門なお日淺し、まして本門をや。末法に入つて、爾前・迹門は全く出離生死の法にあらず。ただ専ら本門寿量品の一品に限つて出離生死の要法なり。これをもつて思うに、諸仏の化導において全く偏頗無し等云々。

問う。仏の滅後、正像末の三時において、本化・迹化の各々の付嘱分明なり。ただ寿量品の一品に限つて末法濁惡の衆生のためなりといえる經文いまだ分明ならず。たしかに經の現文を聞かんと欲す、いかん。

答う。汝あながちにこれを問う。聞いて後、堅く信を取るべきなり。いわゆる、寿量品に云わく「この好き良薬を、今留めてここに在く。汝は取つて服すべし。差えじと受うることなかれ」等云々。問うて云わく、寿量品専ら末法惡世に限る經文顯然なる上は、私に難勢を加うべからず。しかりといえども、三大秘法、その体いかん。

答えて云わく、予が己心の大事これにしかず。汝が志無ければ、少しこれを云わん。

寿量品に建立するところの本尊とは、五百塵点の当初より以來、此土有縁深厚、本有無作の三身の教主・釈尊これなり。寿量品に云わく「如来の秘密・神通の力」等云々。疏の九に云わく「一身即三身を名づけて『秘』となし、三身即一身を名づけて『密』となす。また、昔より説かざるところを名づけて『秘』となし、ただ仏のみ自ら知るを名づけて『密』となす。仏、三世において等しく三身有り。諸教の中においてこれを秘して伝えず」等云々。

(160) 三大秘法家承事 1386

本尊についての最重要文です。

上記「**三大秘法抄**」（新版御書 1386，1388 頁）の最重要文に関して

池田先生は「観心本尊抄」講義 **三大秘法抄**（池田大作全集第 24 卷）で、以下—

「御義口伝に云く南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り、人とは釈尊に帰命し奉るなり、法とは法華經に帰命し奉るなり」と。ここに仰せの「**釈尊**」とは、**文底独一本門の教主としての釈尊であり久遠元初自受用報身、末法御本仏日蓮大聖人御自身**であられます。（略）**「三大秘法抄」で本尊を明かされている御文は「人」の面であります。**いわく「**寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以來此土有縁深厚本有無作三身の教主・釈尊是れなり**」—とご指導です。すなわち、**日蓮大聖人即人本尊**をご指導なのです！ 9/34

上記、AIGemini の「**三大秘法抄**」写本発見への見解も参考に、以下内容にて論述を進めます。

1. 「**三大秘法抄**」の重要性についての池田先生のご指導他
2. 「**法華經の智慧**」で引用された戸田先生の獄中の悟達の持つ本義、重要な意義を示す。(第3巻 326～328 頁を引用) そして、「教学要綱」が獄中の悟達の本義、即ち「戸田先生がまさに御本尊の体内に入られたということ」を無視することへの破折。
3. 須田晴夫著「**日興門流と創価学会**」(289～292頁)を引用し、戸田先生の獄中の悟達での「**三大秘法抄**」の重要義、及び、この御書が日蓮仏法の本義であることを示す。
4. 「教学要綱」が池田先生の「**法華經 方便品・寿量品講義**」「**法華經の智慧**」を紹介、引用にも拘らず、その内容は、この二つの**玉稿**の本義と全く乖離、違背することを示す。
5. 池田先生は「**法華經の智慧**」で、日蓮仏法の真義を、日蓮大聖人の御相伝である「**御義口伝**」「**本因妙抄**」「**百六箇抄**」をもってご指導されています。しかし、「教学要綱」は、大聖人の御相伝の内、「**本因妙抄**」「**百六箇抄**」に記された日蓮本仏論を無視です。その実態は、「教学要綱」5頁、発刊に当たっての「三代会長の指導のままだに、「実践の教学」の大道を貫いていきます」に全く自語相違する、まさに、池田先生への師敵対の暴論であることを論証する。
6. 更なる論考

1. 「三大秘法抄」の重要性についての池田先生のご指導他

以下のご指導より「三大秘法抄」がいかに重書であるか、拝せます。

「若き日の日記・上」(池田大作全集第36巻) 昭和二十六年 三大秘法抄 には—
二月二十日(火) 晴 信仰の絶対性 —正しいことだ。今の宗教界は、不純となってしまう。
(中略)「立正安国論」「三大秘法抄」をば、血涙の流れ出るまで色読せねばならぬ—と。

「広布と人生を語る」第9巻 三大秘法抄 1986.6 には— 他宗や学界において大聖人の「三大秘法抄」についての真偽論争が古くからたえず行われてきた。しかし、数年前、文部省の統計数理研究所が、コンピューターを使って文法的特徴や使用単語の特徴などを分析したところ、大聖人の御真作にまちがいないとの判定結果がでた。このことは、新聞に報道されたのでご存知の方も多と思う。大聖人の御書をコンピューターで判定するということはおそれ多いことであり、また、そのみで真偽が論じられてはならないが、時代に即応したかたちでもはっきりした証明がなされて、私はたいへんうれしく思ったしだいである。かつて、総本山第六十六世日達上人にお目通りした折、同抄の真偽の疑難について種々、御指南をいただいたことがある。そのさい、さまざまな角度から御真作である旨、仰せになられたことが、今は懐かしい思い出である。

「三大秘法抄」が大聖人の御真作であるとすれば、それを依文として、これまで社会に「立正安国」の活動を展開してきた創価学会の実践が、大聖人の御精神に照らして正しかったことが証明されたわけである—と。

小説「新・人間革命」第3巻「仏法西還」 三大秘法抄 には—古来、大陸と交流の深かった九州に、戸田城聖は、東洋広布への大きな期待を託していた。逝去の半年前、九州総支部の結成大会に出席した戸田は、アジアの実情について触れ、創価学会の使命を語り、こう話を結んだ。「願わくは、今日の意気と覇気とをもって、日本民衆を救うとともに、東洋の民衆を救ってもらいたい」それが、戸田の、九州での最後の指導となったのである。

九州の同志は、戸田のその言葉を胸に刻んできた。それだけに、会長山本伸一のアジア訪問を、どこよりも喜び、この日の三総支部結成大会を、伸一とともに東洋の平和のための旅立ちの日にしようとしていた。伸一は、この席上、恩師をしのびつつ、アジア訪問について、語っていった。「私は、今月の二十八日から、日達上人とともに、インド及び東南アジアに行ってまいります。日達上人は、『三大秘法抄』(三大秘法稟承事)を書写され、これを釈尊の成道の地であるブッダガヤに、埋納することになっております。日蓮大聖人の独一本門の肝要である三大秘法について述べられた、この御書を埋納することは、真実の仏法がいよいよ日本から西還しゆく、先駆けの証であります。—と。 11/34

随筆 新・人間革命2 「御書根本」の正道 **三大秘法抄** (池田大作全集第130巻)には一第二代戸田城聖先生もまた、獄中であって、地涌の菩薩の使命を自覚され、法華経と御書を根本として、広宣流布の大闘争に立たれた。ことに、先生は、第二代会長に就任される前、事業が窮地にあったころから、生命を削るようにして、私に御書を教えて下さった。今、当時の日記から拾ってみても、「**御義口伝**」「草木成仏口決」「一生成仏抄」「観心本尊抄」「生死一大事血脈抄」「立正安国論」「諸法実相抄」「**三大秘法抄**」「総勘文抄」「顕仏未来記」「諫曉八幡抄」等々の御抄が記されている。ご自宅や西神田の旧学会本部はもとより、出張にご一緒した折には、列車の中も御書講義の教室となった。また、「**百六箇抄**」の講義を受けた時期もあった。

ある日、先生は、横になってお休みであつたにもかかわらず、「よし、やろう!」と言われて、快く教えてくださったこともある。しかし、私に少しでも真剣さが欠けた時には、先生は言下に叱咤された。「やめた! 私は機械じゃないんだ」ともあれ、このように火花が散るごとく、全魂を傾けて、師から弟子へ、生命から生命へ、日蓮仏法の真髓を伝授してくださったのである。有り難い師匠であつた。一と。

(私見)最後の引用には、「**御義口伝**」「**百六箇抄**」そして「**三大秘法抄**」が記されています。この度、**三大秘法抄**の写本が見つかったことはご相伝と並び、「**三大秘法抄**」がどれほど重要な御書であるか拝察出来ます。さらに、写本によりこの重書の存在が証明されたことは日蓮大聖人の御計らいなのだと確信しております。

また、池田先生ご監修の

「**仏教哲学大辞典**」初版(1970年)には以下あります。(一部抜粋)

(一) 本抄の意義 この三大秘法抄には、日蓮大聖人の御一期の化導を総括して、三大秘法すなわち本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇について、その出現の縁由と、体とが説示されている。ことに、本門の戒壇については、始めて相貌を明かされている。ゆえに日蓮大聖人の御書四百数十編の中では、極めて重要な地位を占めている。日蓮大聖人の仏法において、三大秘法こそ、もっとも大事な法門なるがゆえである。

さんだいひほうしょう 【三大秘法抄】
三大秘法聖承事ともいう。日蓮大聖人が弘安四年四月八日、御年六十歳の時のご述作(一〇二一頁)である。対告衆は檀越たる大田金吾である。大田金吾は下総国葛飾郡の八幡荘の中山に住し、富木常忍や曾谷教信等と共に日蓮大聖人の弟子として外護にとめた。その子は帥の阿闍梨日高である。

日蓮大聖人の御書の中には、五大部あるいは十大部と称する重要な御書が定められている。すなわち立正安国論、開目抄、観心本尊抄、撰時抄、報恩抄等の御書である。三大秘法抄は、この五大部、十大部等には入っていないが、これは、この書の伝持の上から特異の立ち場にあつたために、そのように扱われたのである。しかし、三大秘法抄は御指南の法門から拝すれば、もつとも重要な御書である。三大秘法抄には日蓮大聖人御一代の大綱を示されている。すなわち本抄より他の御書は、日蓮大聖人出世の縁由とか、諸宗の破折とか、題目とか、あるいは御本尊等について教示されたり、あるいは三大秘法の名目のみを示されているが、三大秘法を整足して教示されたのは、この三大秘法抄のみである。

ゆえに、日蓮大聖人の御教導の終窮究竟の全貌と大綱とを拝察するには、この三大秘法抄に依る以外にはない。よって、日蓮大聖人の御書を拝するには、第一にこの三大秘法抄を拝し、大綱を了解し終つて後に他御書を拝するのが正しいといえよう。この拝読の順序をとらず、三大秘法も解せず、無秩序に御書を拝する時、日蓮大聖人の御正意を了解できない恐れが十分にある。

事実、日蓮大聖人の弟子門下と自称する日蓮宗各派は、ほとんど御書を拝し御書に依るのは当然であるが、それにもかかわらず御本尊より題目に重点をおいたり、本門戒壇の建立を否定したり、釈迦を本尊と立てたり、全く支離滅裂な誤謬をおかしている。これ皆、日蓮大聖人御一代の施化の大綱を拝察しないで、御書の一文一義に執する故である。

(二) 本抄の伝持 この三大秘法抄は、現在、御真蹟が行方不明であり、伝持の上から一般に伝わらず、かつ他の御書とはいちじるしく趣きが異なっているため、古来から三大秘法抄には真偽論があつた。しかし、多くの研究討論もあり、三大秘法抄の偽書説は、次第に影が薄らいで、今日では、極く一部の者が偽書説を踏襲しているにすぎない。それでも、三大秘法抄が充分に確固たる地位が認識されなければ、日蓮大聖人の仏法を正しく理解するために、大きな障害となることは当然である。ゆえに、少しの異議もなく、三大秘法抄の御真撰なることが確立されなければならない。

本抄が他の御書と趣が異なるのは、他の幾多の御書が、日蓮大聖人の教義を漸時展開された主旨において御述作なされたのに対し、本抄は、すでに展開し給わった施化を整足して、御本意を明示された故である。三大秘法抄御述作の目的は、本抄の終わりに示された次の御文で拝察できる。すなわち三大秘法抄（一〇二三頁）には「予年来已心に秘すと雖も此の法門を書き付て留め置ずんば門家の遺弟等定めて無慈悲の讒言を加う可し、其の後は何と悔ゆとも叶うまじきと存ずる間貴辺に対し書き送り候、一見の後・秘して他見有る可からず口外も詮無し」とある。この御文によって拝察すると、日蓮大聖人は将来のために具えて、本抄を御述作なされたことは明白である。すなわち将来のためとは、化儀の広宣流

(中略)

さらに、日蓮大聖人は、御入滅後に遺弟間において、種々の異議を生じた時の具えとされたことも明らかである。この上から日蓮大聖人の施化の大綱を示され、将来において誤りなきよう留意されたのである。日蓮大聖人の弟子にあっても、信心の厚薄、智解の浅深があり、とくに末法の深奥なる文底下種仏法を根本から信心領解することは困難であった。ゆえに第二祖日興上人のほかの五老僧といわれる弟

子たちは、難を恐れて天台沙門と称えて退転し、三大秘法に對する多くの異解も生ずる結果となったのである。日興上人に對する百六箇抄や本因妙抄等の御相伝書の御用意を思うとき、御入滅後の将来を慮かられ、三大秘法抄を遺されて、門弟の異義を是正される御用意と拝すべきである。

次に、本抄の御真蹟が今日、所在が不明なる所から、偽書説を唱えるものがある。しかし、前述したごとく、日蓮大聖人は本抄を相伝書の形で授与されたことは、本抄（一〇二三頁）の「一見の後・秘して他見有る可からず口外も詮無し」とおおせの御文からみて、まことに明白である。これは本尊の大事を明かされ最重要書といわれる観心本尊抄の送状（二五五頁）に「此の書は難多く答少し未聞の事なれば人耳目を驚動す可きか、設い他見に及ぶとも三人四人坐を並べて之を読むこと勿れ」と誠にめられたものよりも、さらに厳しい誠めであることから明らかである。この「一見の後・秘して他見有る可からず口外も詮無し」との厳誠にによって、大田金吾は一般に公表することなく護持したので、一般門下はかかる重書、三大秘法抄が遺されたことを知らなかったわけである。

（私見）上記より、「三大秘法抄」の重要性がわかります。その重書の写本が発見され、その存在が証明されたことは、日蓮仏法の真義、「人法一箇の御本尊」がさらに明白に論証され、結論、人法一箇を否定する「教学要綱」の邪義がさらに確定されたと断言します。

また、三大秘法の根本である本門の本尊について、池田先生ご監修の「仏教哲学大辞典」第三版（2000年）には、以下あります。（一部抜粋）

ある。次に三大秘法は六義（六大秘法）に開かれる。まず本門の本尊に人と法の二義がある。人の本尊とは久遠元初自受用身の内証を覓り、本因下種の妙法を説いて末法下種の主師親三徳を顕した日蓮大聖人。法の本尊とは文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華經を顕した事の一念三千の御本尊である。また本門の戒壇に義と事がある。事の戒壇とは先に引用した三大秘法抄にあるように広宣流布の事相の成就に応じて建立される戒壇で、大聖人はこの事の戒壇に安置すべき御本尊として本門戒壇の大御本尊を顕された。義の戒壇とは本門の本尊を安置し、受持し奉る全ての所が、その意義において事の戒壇にあたることをいう。次に本門の題目には信と行がある。信の題目とは本門の本尊を信することであり、行の題目とは南無妙法蓮華經と唱える唱題、および南無妙法蓮華經を弘める化他の実践である。以上のように三大秘法を開けば人の本尊と法の本尊、事の戒壇と義の戒壇、信の題目と行の題目の六義となる。この六義を更に開けば八万宝蔵となる。また、これを合するときには八万宝蔵ただ六義となり、六義を合すれば三大秘法となり、三大秘法を合すれば一大秘法の本門の本尊となる。故に本門の本尊は万法の体なのである。

（四）本門の本尊 本尊とは「根本として尊敬（尊崇）する」の意で、信仰の根本対象をいう。本門の本尊は三大秘法の中の随一であり、三大秘法が全て具わる一大秘法でもある。本門の本尊に人本尊と法本尊がある。

①法本尊 事の一念三千・無作本有の南無妙法蓮華經を顕した大聖人の曼荼羅本尊が法本尊である。この南無妙法蓮華經は三世の諸仏の能生の根源であり、一

切衆生成仏の種子、即ち仏種である。日蓮大聖人は末法には何を本尊とすべきかについて本尊問答抄に「問うて云く末代惡世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし……不空三蔵の法華儀軌は宝塔品の文によれり、此れは法華經の教主を本尊とす法華經の正意にはあらず、上に挙ぐる所の本尊は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊・法華經の行者の正意なり……本尊とは勝れたるを用うべし」（三六五頁）と明かし、更に「問うて云く然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の題目を本尊とするや、答う上に挙ぐるところの経釈を見給へ私の義にはあらず釈尊と天台とは法華經を本尊と定め給へり」（三六六頁）と示されている。つまり末法においては釈尊を本尊とすることは誤りであり、むしろ釈尊自身が本尊と定めた法華經の題目、即ち寿量文底下種の南無妙法蓮華經を本尊とすべきであると言う。また觀心本尊抄には「一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり」（二四六頁）と述べ、仏種である根源法を顕してこそ本尊たりうることを示されている。また經王殿御返事には曼荼羅本尊図題について「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」（一二二四頁）と述べ、南無妙法蓮華經が本尊の当体であることを示されている。次に曼荼羅本尊の相貌については觀心本尊抄に「塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏」（二四七頁）と中尊の南無妙法蓮華經と脇土の釈迦・多宝の二仏の關係を示し、更に「釈尊の脇土上行等の四菩薩」「文殊・弥勒等は四菩薩の眷屬」と重層的な關係を示して南無妙法蓮華經

が根本の本尊であることを浮き彫りにしている。また日女御前御返事には御本尊の相貌の意義を觀心本尊抄とは別の角度から明らかにされており、首題の南無妙法蓮華經の功德で一切の衆生が本有の尊形になると仰せである。すなわち「されば首題の五字は中央にかかり・四天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・本化の四菩薩肩を並べ……総じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此の御本尊の中に住し給い妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊と申しなり」（二四三頁）とある。これまた南無妙法蓮華經が一切衆生を尊厳たらしめる功德の根本であることを示している。大聖人が曼荼羅本尊として顕された「日蓮がたましひ」たる南無妙法蓮華經は三世の諸仏を生んだ能生の根源、即ち本源的な仏種である。故に大石寺第二十六世・日寛の觀心本尊抄文段には「これ則ち諸仏諸經の能生の根源にして、諸仏諸經の帰趣せらるる処なり。故に十方三世の恒沙の諸仏の功德、十方三世の微塵の経々の功德、皆咸くこの文底下種の本尊に帰せざるなし。譬えば百千枝葉同じく一根本に趣くが如し。故にこの本尊の功德、無量無辺にして広大深遠の妙用あり。故に暫くもこの本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顕れざるなきなり」（文段集四四三頁）とある。

②人本尊 日蓮大聖人は南無妙法蓮華經を「日蓮がたましひ」であると言われている。これは、日蓮大聖人が法本尊である南無妙法蓮華經を自らの生命の根源の当体として開覚・修行し、末法の衆生のために曼荼羅本尊として顕したということである。即ち日蓮大聖人の生命は法本尊の南無妙法蓮華經と一体である。御

義口伝には「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」(七六〇頁)、「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり……仏とも云われ又凡夫僧とも云われるなり」(七六六頁)とある。人法一体の南無妙法蓮華經を末法衆生のために顕し、弘めたがゆえに大聖人を末法の御本仏と拝するのである。日蓮大聖人を人本尊・末法の御本仏と拝する所以について、大聖人の内証の境地を示す「久遠元初自受用報身如来」、弘める教法との關係を示す「本因妙の教主」、衆生・時代に対する徳を示す「末法下種の主師親」と「大慈大悲」の四つの観点から以下に述べる。

(イ) 久遠元初自受用報身如来 「久遠元初」とは、法華經如来寿量品第十六に釈尊の眞の成仏の時として説かれる五百塵点劫久遠の当初という意味で、寿量品に準じて時間的な表現をとっているが、無始無終の妙法を自身の当体と開覚する根源的な成仏の時そのものを指している。むしろ、時間を超えた永遠にして根源的な無始無終の妙法そのもの、あるいは我が生命が無始無終の妙法と一体であるとの生命の実相を指しているとも言える。無始無終の生命は方法を包み、かつ万法に顕現する根源の一法であり、この一法を自身の当体と開覚するのが成仏の本源である。御義口伝にも「久遠とははたらかず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」(七五九頁)とあり、久遠とは本有常住の法であり、また自らの生命が本有常住の法と一体であることを開覚した本源的な仏界の生命であることが示されている。この久遠とは久遠元初のことである。次に「自受用報身」とは自受用身ともいい、元初の妙法と一体の自己自身を覚知し、その智慧で妙法の無限の力を自らの身に受け用いる仏身のこと。その智慧

身・功德身の面において報身といわれるが、その報身も凡夫の身から決して離れたものではなく、むしろ凡夫の身に即した自己自身として感得されるので自受用身といわれるのである。総勘文抄に「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」(五六八頁)と述べられているように、凡夫として自身の生命が地水火風空即ち宇宙と一体なること、つまり我が身も宇宙も妙法の当体であることを即座に開覚した仏こそが久遠元初の仏である。日蓮大聖人は法華經の行者として幾重もの大難を乗り越え、文永八年(一二七一年)九月十二日の竜の口の法の難の時に発迹顕本された。発迹顕本とは迹を発いて本を顕すと読み、名字凡身(法華經を信する凡夫の身)という迹(仮の姿)を開いて、その凡夫の身の当体が即ち久遠元初自受用報身であるとの本地を顕すことである。法難直後の四条金吾殿御消息には「日蓮が難にあう所ごとに仏土なるべきか、娑婆世界の中には日本国・日本国の中には相模の国・相模の国の中には片瀬・片瀬の中には竜口に日蓮が命を・とどめをく事は法華經の御故なれば寂光土ともいふべきか」(一一三頁)とあり、この寂光土とは自受用身の国土を表している。また翌年二月の開目抄には「日蓮といふ者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて……」(二三頁)と述べられている。この魂魄とは久遠元初自受用報身を表し、この文には日蓮大聖人が竜の口での発迹顕本以後、自受用身を内証とする凡夫即極の仏として振舞われていることが示されている。

(ロ) 本因妙の教主 本因妙とは成仏の根本原因であり仏種である南無妙法蓮華經をいい、その南無妙法蓮華經を修行・開覚し、説き弘めた日蓮大聖人を本因妙の教主という。百六箇抄に「我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり」(八六三頁)とある。法華經本門寿量品の文上(脱益寿量)においては釈尊が五百塵点劫の久遠に成仏したことが説かれ、その釈尊が諸仏の本身であり、諸仏は釈尊の分身であること等が説かれて、久遠実成の釈尊の偉大な救済力が示されるのに対して、その釈尊の偉大な力も、釈尊が久遠において菩薩道を実践して本因妙の南無妙法蓮華經を内証に開覚したことに帰するととらえるのが内証の寿量品である。文上の寿量品では釈尊が久遠において成就した本果を中心に仏界の生命の永遠性を示すのに対して、内証の寿量品は成仏の本因である無始無終の妙法即永遠の生命を自己自身の内証として直ちに開覚するための教法である。観心本尊抄には「所詮迹化他方の大菩薩等に我が内証の寿量品を以て授与すべからず……地涌千界の大菩薩を召して寿量品の肝心たる妙法蓮華經の五字を以て閻浮の衆生に授与せしめ給う」(二五〇頁)とあり、内証の寿量品とは釈尊から地涌の菩薩に授与された妙法蓮華經の五字、即ち南無妙法蓮華經に他ならないこと、そして内証の寿量品を世界に弘める人は地涌の菩薩であることが示されている。この地涌の菩薩の棟梁が上行菩薩であり、法華經如来神力品第二十一では地涌の菩薩の代表として釈尊から要法を付嘱される。これは上行菩薩が釈尊滅後に出現して南無妙法蓮華經を顕し、弘める本因妙の教主であることを示す。この上行菩薩の再誕として振る舞われたのが日蓮大聖人であるが、その元意は御自身が本因妙の教主であることを示すことにある。報恩抄に「日本・乃至一閻浮提・一同

に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし」(三二八頁)と示され、三大秘法抄に「寿命品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり」(一〇二二頁)とあるように、大聖人は本門の本尊について「教主釈尊」と表現されることがあるが、これは文上の本果妙の釈尊ではなく、菩薩道を行じて本因妙の内証を覚知した文底の釈尊の意であり、結局のところ本因妙の教主、日蓮大聖人自身のことなのである。下山御消息に「教主釈尊より大事なる行者……日蓮」(三六三頁)と述べられているのは、末法においては本果妙の教主釈尊ではなく、本因妙の教主・日蓮を本尊とすべきことを示唆している。また新池殿御消息には「主師親の釈尊をもちひぬだに不思議なるに、かへりて或はのり或はうち或は処を追ひ或は讒言して流罪し死罪に行はる」(一四三七頁)と述べ、迫害を受ける大聖人を三徳具備の釈尊と同等視しているが、これも大聖人の一身に本尊を見るべきことを示唆しているのである。

(ハ) 末法下種の主師親 日蓮大聖人は下種弘法における主師親の三徳を具備した仏である。主の徳とは衆生を守る働き、師の徳とは衆生を正しく導く働き、親の徳とは衆生を慈しむ働きであるが、末法においては仏種である本因妙の南無妙法蓮華經を弘めなければ衆生を救う三徳は具わりえない。それ故に南無妙法蓮華經の仏種を三大秘法という末法万年の民衆救済の大法として建立し弘められた日蓮大聖人こそが末法下種の主師親を具備した仏である。故に開目抄には「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」(二三七頁)と示され、報恩抄には「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし」(註・親徳)、日本国の一切衆生の首目をひらける功德あり(註・師徳)、無間地獄の道をふさぎぬ(註・主徳)、此の功德は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたる」(三二九頁)と述べられて、日蓮大聖人自身が末法における三徳有縁の仏であることが明かされている。

(ニ) 大慈大悲 日蓮大聖人が本因妙の南無妙法蓮華經を説き弘めるのも、末法衆生に主師親三徳を顕すのも、すべて根源は久遠元初自受用身としての慈悲の発露である。即ち、万人が自身と同じ妙法の当体と知るゆえに万人を慈しむのであり、また衆生の苦悩を我がこととして悲しむのである。その大慈大悲の境地は「一切衆生の異の苦を受けるは悉く是れ日蓮一人の苦なるべし」(七五八頁)、「されば日蓮が法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いだきぬべし」(二〇二頁)、「今日蓮は去ぬる建長五年^{癸卯}四月二十八日より今年弘安三年^{庚辰}十二月にいたるまで二十八年が間又他事なし、只妙法蓮華經の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり、此れ即母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり」(五八五頁)、「大悲とは母の子を思う慈悲の如し今日蓮等の慈悲なり、章安云く『彼の為に悪を除くは即是れ彼の親』と」(七二二頁)、「一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裏み末代幼稚の頭に懸けさしめ給う」(二五四頁)等と日蓮大聖人自らが表明されているように、同苦・忍難・弘教の強靱な実践として現されているのである。

☆

③ 人法一箇 法本尊と人本尊は体一であり、法に即して人、人に即して法である。これを人法一箇あるいは人法体一という。法に即して人とは、法本尊である南無妙法蓮華經は万法を包み、万法に顕現する宇宙根源の一法であるが、それに南無する人間の心が根源の一法に合致すれば、その人は仏界の生命のままに自在に振る舞う自受用身、即ち人本尊と現れるのである。人に即して法とは、南無妙法蓮華經を我が魂と開覚して人本尊と現れた人が、我が魂たる南無妙法蓮華經を自らが行ずるだけでなく、万人が信解し、行じていける法本尊として顕していくことである。南無妙法蓮華經を我が魂として開覚し、人間生命の上に事実化している故に、万人が信じ、実践していける法本尊として顕せるのであり、したがって弘めていくことができるのである。日蓮大聖人は法華經の行者としての信行を大難を超えて貫き、南無妙法蓮華經を「日蓮がたましひ」として開覚し、それをもって末法の衆生を救済するために事の一念三千・無作本有の南無妙法蓮華經の法本尊として顕され、また三大秘法として弘められたのである。このような人法一箇の深義について大聖人は御義口伝で「自受用身とは一念三千なり、伝教云く『一念三千即自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり』云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云」(七五九頁)と述べられている(所引の伝教大師の言葉は秘密莊嚴論の文)。尊形を出でたる仏とは、何も身を飾らない凡夫の身のままの仏という意味である。なお、大石寺第二十六世日寛は、大聖人が自身の生命の上に事実化され、自覚化している南無妙法蓮華經を三大秘法として実践化することを「事を事に顕す」(『本門の本尊』)、「事を事に行ずる」(『本門の題目』)と表現している。

また、「観心本尊抄」講義 三大秘法抄 (池田大作全集第 24 卷)には一「御義口伝に云く南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り人とは釈尊に帰命し奉るなり法とは法華經に帰命し奉るなり」と。ここに仰せの「釈尊」とは、文底独一本門の教主としての釈尊であり、久遠元初自受用報身、末法御本仏日蓮大聖人御自身であります。また「法華經」と仰せられているのも「今末法に入りぬれば余經も法華經も詮なし、但南無妙法蓮華經なるべし」と「上野殿御返事」に示されているごとく、釈尊の二十八品の法華經などでないことは明らかであります。したがって「但南無妙法蓮華經」を指して「法華經」と仰せられたと拝するのであります。諸御抄を拝する時、大聖人は、種々の場合に応じて、ある時は「人」の面で表現され、ある時は「法」としてこれを述べておられる。

例えば「三大秘法抄」で本尊を明かされている御文は「人」の面であ

ります。 いわく「寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり」と。「報恩抄」の「日本・乃至一閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし」の御教示も同じく人の本尊を言われております。これに対して「本尊問答抄」の場合は法の本尊を示されている。すなわち「問うて云く末代惡世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし」とございます。このように一方においては「人」として仰せられ、他方、法華經の題目、妙法蓮華經という「法」として示されている元意は人即法、法即人を明かされるにあり、そして、一幅の漫荼羅の御本尊こそこの人と法とが体一である人法一箇の御当体なのであります。

先の「御義口伝」の御教示は、それを前提とされての表現であり、また、同じく「御義口伝」には「無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」と、人法体一の義を示されております。しかして、この大御本尊こそ、その人法一箇の当体であることを「日女御前御返事」には、次のように仰せられている。「伝教大師云く「一念三千即自受用身・自受用身とは出尊形の仏」文、此の故に未曾有の大曼荼羅とは名付け奉るなり、仏滅後・二千二百二十余年には此の御本尊いまだ出現し給はず」とございます。結論して言うならば、日蓮大聖人御自身が、我が身妙法の当体と覚知された法即人の仏であり、無作三身の如来であられる。ゆえに「御義口伝」に「無作の三身とは末法の法華經の行者なり」と。大聖人は、この無作三身如来としての御自身の生命をそのまま一幅の曼荼羅として御本尊に顕された。そこに人法一箇の御本尊たるゆえんがあります。四條金吾夫妻に与えられた「経王殿御返事」に「日蓮が魂を墨にそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」と述べられているのは、まさに、このことなのであります。これらの御教示を信心で受ける私どもは、御本尊即、生身の日蓮大聖人と拝するのみであります。—と。

2.「法華經の智慧」で引用された戸田先生の獄中の悟達の持つ本義、重要な意義を示す。(第3巻326～328頁を引用)そして、「教学要綱」が獄中の悟達の本義、即ち「戸田先生がまさに御本尊の体内に入られたということ」を無視することへの破折。 第3巻 法華經は一切衆生の己心のドラマ には、－

齊藤 それは、戸田先生の「己心」の中の悟りですね。その時の獄中の戸田先生を、もしか別の人が見ていたとしても、その人には虚空会は見えなかったでしょう。

池田 己心です。法華經自体が釈尊の己心の説法であると戸田先生は言われていた。序品（第一章）や神力品（第二十一章）の瑞相も、声聞や菩薩たちとの対話も、宝塔の出現も、地涌の菩薩の涌出も、全部、釈尊己心のドラマと見ることができる。

須田 インドの靈鷲山に行った時、地涌の菩薩が出てきた大地の割れ目を探していた人がいました(笑)。しかし、あくまで己心のドラマであって事実ではありませんね。

池田 歴史的な事実ではないが、「生命の真実」を表しているのです。

齊藤 この語らいでも、歴史的な事実ではない法華經のドラマを、便宜上、事実であるかのように語ってきたことがあります。それは、必ず「生命の真実」を表していると考えられるからです。遠藤 釈尊己心の説法ということでわかりにくいのは、釈尊自身です。法華經に登場する釈尊も「釈尊己心の釈尊」ということになるのでしょうか。

池田 釈尊己心の自己自身です。ある意味で、迹門から本門に至る過程は、釈尊が「真実の自己」を顕していくためにあると言えるのではないだろうか。他の登場人物や出来事も、すべて釈尊自身の「真実の自己」を顕すための役割を担っている。

齊藤 寿量品（第十六章）の久遠の本仏が釈尊の「真実の自己」にあたるわけですね。

池田 そう。久遠の本仏は、永遠の妙法と一体の「永遠の自己自身」を表しているのです。

須田 地涌の菩薩も「釈尊己心の菩薩」ということになりますね。

池田 釈尊の「永遠の自己自身」に具わる「永遠の菩薩」です。「御義口伝」にも「釈尊・所具の菩薩なるが故本地本化の弟子を召すなり」と仰せです。釈尊だけではない。大聖人は「一人を手本として一切衆生平等」と仰せです。釈尊の「永遠の自己」は一切衆生の「永遠の自己」なのです。一切衆生が総じては本仏なのです。地涌の菩薩も一切衆生に具わる「永遠の菩薩」です。そのことを大聖人は「観心本尊抄」で、「妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の功德は骨髓に非ずや」、「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顯の三身にして無始の古仏なり」、「上行・無辺行・淨行・安立行等は我等が己心の菩薩なり」等と仰せられている。

遠藤 法華經のドラマは、一切の人々の生命のドラマなのですね。そうしますと、**大聖人の法華經——御本尊**も同様でしょうか。

池田 大聖人は、虚空会という法華經の舞台を用いて、ご自身の「永遠の自己自身」を御本尊として顕されたのです。大聖人の「永遠の自己自身」とは、言うまでもなく「南無妙法蓮華經」です。御本尊の中央に「南無妙法蓮華經日蓮」とお認めの通りです。

齊藤 御書にも「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」と仰せです。

池田 戸田先生の獄中の悟達も、“折伏戦の棟梁”としての「永遠の自己自身」をつかまれたと考えられる。これが虚空会の体験です。それは、まぎれもない「生命の真実」です。「事実以上の根源的事実」なのです。ですから戸田先生は、虚空会を事実として語られている。学会員も、そこに連なっていたのだと語られたこともあった。

遠藤 「ボヤボヤして後ろのほうで居眠りなんかしていた人が、いまになって教学がわからないのです」(『戸田城聖全集』5)ともおっしゃっています(笑い)。齊藤 戸田先生はまた「われわれの胸にも御本尊はかかっているのです。すなわち御仏壇にある御本尊即私たちと信ずるところに、この信心の奥底があります」(同全集5)とされています。これも獄中でつかんだことの表現なのですね。須田 **大聖人の顕された御本尊の相貌が、戸田先生が獄中でつかんだものと寸分違わず異ならなかった。この事実も戸田先生がまさに御本尊の体内に入られたということの証左**と思います。

池田 戸田先生は、権力の魔性とまっこうから戦われた。その信心によって得られた大境涯です。以信得入です。それで法華經がすらすら読めるようになった。法華經が説き示そうとしているのが、永遠の妙法、すなわち南無妙法蓮華經であることが体得できたからです。ですから、「御本尊への信心がなく法華經が読めるものか。読めるわけがない」とよくおっしゃっていた。足下を掘れ、そこに大生命あり

須田 獄中で唱題と思案の闘いは、法華經との対決であると同時に、ご自身を見つめ、ご自身を掘り下げられていった実践であったと思います。

池田 「仏とは何か」を追求し抜いて、仏とはほかならぬ自分のことであり、宇宙の大生命であり、それらは一体であるとわかった。“足下を掘れ、そこに泉あり”という言葉は有名だが、自身の根源を掘り下げていく時、そこに万人に共通する生命の基盤が現れてきた。それが永遠の宇宙生命です。戸田先生は、まさに自身の根源を悟られるとともに、“あらゆる人が、じつは根本においては地涌の菩薩である”という人類共通の基盤を悟られたのです。その“生命の故郷”を知ったのが、学会員です。—と。 20/34

しかし、「教学要綱」55～56頁には—池田先生は、一九九五年五月から、機関紙「聖教新聞」紙上で「法華經 方便品・寿量品講義」の連載を行い、さらに同年、機関誌「大白蓮華」二月号から、「法華經の智慧—二十一世紀の宗教を語る」と題する長期連載を行った。この連載の中で、池田先生は、「仏とは生命なり」「我、地涌の菩薩なり」との戸田先生の獄中の悟達について、「戸田先生は、まさに自身の根源を悟られるとともに、あらゆる人が、じつは根本においては地涌の菩薩である」という人類共通の基盤を悟られたのです。その“生命の故郷”を知ったのが、学会員です」と述べている一だけです。

(私見) 池田先生は、上記、「法華經の智慧」で、以下、ご指導なのです。

- ①. 宝塔の出現も、地涌の菩薩の涌出も、全部、釈尊己心のドラマ
- ②. 須田氏の発言 地涌の菩薩も「釈尊己心の菩薩」ということになりますね。—に対して、釈尊の「永遠の自己自身」に具わる「永遠の菩薩」です。
- ③. 大聖人の「永遠の自己自身」とは、言うまでもなく「南無妙法蓮華經」です。御本尊の中央に「南無妙法蓮華經日蓮」とお認めの通りです。
- ④. 大聖人は、虚空会という法華經の舞台を用いて、ご自身の「永遠の自己自身」を御本尊として顕されたのです。大聖人の「永遠の自己自身」とは、言うまでもなく「南無妙法蓮華經」です。御本尊の中央に「南無妙法蓮華經日蓮」とお認めの通りです。
- ⑤. 須田氏の発言 大聖人の顕された御本尊の相貌が、戸田先生が獄中でつかんだものと寸分違わず異ならなかった。この事実も戸田先生がまさに御本尊の体内に入られたということの証左 —に対して、戸田先生は、権力の魔性とまっこうから戦われた。その信心によって得られた大境涯です。

そして、その論述の途中には—「観心本尊抄」で、「妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の功德は骨髓に非ずや」、「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり」、「上行・無辺行・淨行・安立行等は我等が己心の菩薩なり」等と仰せられている—と引用です。この「古仏」は久遠元初授受用身如来の日蓮大聖人です。—との、日蓮本仏論をご指導なのです。

上記の本義を踏まえず、「教学要綱」は池田先生の玉稿「法華經の智慧」での、戸田先生の獄中の悟達について最後の文—戸田先生は、まさに自身の根源を悟られるとともに、”あらゆる人が、じつは根本においては地涌の菩薩である”という人類共通の基盤を悟られた一だけを引用し、地涌の菩薩の意義のみを強調するのです。なぜ、池田先生の深いご指導を引用しないのか！このような作為的引用は、「法華經の智慧」の本義の紹介ではない！ましてや戸田先生の獄中の悟達の本意ではない！偏頗としかいえない！これこそ「教学要綱」の狡猾な作文であると断じます！ 21/34

3. 須田晴夫著「**日興門流と創価学会**」(289~292頁)を引用し、戸田先生の獄中の悟達での「**三大秘法抄**」の重要義、及び、この御書が日蓮仏法の本義であることを示す。私見はありません。以下、正論と拝しております。

巖さんは法華經の開經である無量義經を前にして、眼鏡の底の眼を鋭く光らしていた。

開經とは、本經を説かれる前の予備、下準備に説かれる序經のことで、論文に序論、本論、結論とある……その序論に当たるのだ。

『大なる哉大悟大聖主、垢なく染なく所著なし。天人象馬の調御師、道風徳香一切に薰じ、智恬かに情泊かに慮凝静かなり。意滅して識亡して心亦寂なり。永く夢妄の思想念を断じて、また諸大陰入界なし。其の身は有に非ず亦無に非ず。因に非ず縁に非ず自他に非ず。方に非ず円に非ず短長に非ず。出に非ず没に非ず生滅に非ず。造に非ず起に非ず為作に非ず。座に非ず臥に非ず行住に非ず。動に非ず転に非ず閑静に非ず。進に非ず退に非ず安危に非ず。是に非ず非に非ず得失に非ず。彼に非ず此に非ず古来に非ず。青に非ず黄に非ず赤白に非ず。紅に非ず紫種種の色に非ず。戒定慧解知見より生じ、三昧六通道品より発し、慈悲十力無畏より起こり、衆生善業の因縁より出でたり……』

巖さんの眼鏡の底の眼は無量義經の徳行品第一を読んでいる行つて、偈のところへくると、白い焰のように光つて、最早、眼が読み進んでいるのではなく、頭で読んでいるのもなく、彼はその一字一句へ逞しい身体を叩きつけているのだった。(中略)

思案を打ち切つて題目を唱えだした声が独房に響き渡

り、それが消えると、彼は死物狂いの思索に入っている。『仏とは生命なんだ!』

巖さんが机の前で叫んだ時、凍った海底のように、寒さを湛えてシン! となっていた部屋に、強く両手を打ち合わせた音がばあん! と響いた。

『仏とは、生命の表現なんだ! 外にあるものではなく、自分の命にあるものだ! いや、外にもある! それは宇宙生命の一実体なんだ!』

巖さんは独り叫びつづける。紅い血が頬に躍っており、眼鏡の底の眼が妖しいまでに輝いている。

『仏とは生命なんだ!』(『戸田城聖全集』第八卷四九六頁)

戸田の弟子である第三代会長池田大作は、この時の戸田の悟達について、自身の小説『人間革命』で次のように述べている。

「戸田城聖のこの覚知の一瞬は、将来、世界の哲学を變貌せしむるに足る一瞬であつたといつてよい。それは、歲月の急速な流れとともに、やがて明らかにされていくにちがいない。

彼は、仏法が見事に現代にもなおはつらつと生きていることを知り、それによつて、現代科学とも全く矛盾がないことを確信した。そして仏法に、鮮明な現代的性格と理解とを与えたのである。いや、そればかりではない。

日蓮大聖人の仏法を現代に生かし、あらゆる古今東西の哲学を包含する生命哲学の誕生であつた」(『人間革命』)

第四卷「生命の庭」。

戸田は出獄後、「仏とは生命なり」とする生命論の観点から仏教を説明し、運動を展開した。戸田が苦難の中で到達したこの悟達は仏教を現代に生きる思想として蘇生させる梃子となつた。これ以後、創価学会の思想は戸田が把握した生命論を基盤に展開され、その潮流は今日、全世界に及んでいる。

戸田の獄中での思索はその後もさらに続いていた。年頭からの唱題が二百万遍になろうとしていた十一月中旬、戸田は唱題を重ねる中で重要な宗教体験を掴んだ。それは、自身が地涌の菩薩の一人として、法華經に説かれる虚空会こくうえの会座に連なっていることを感得するという体験だった。この時の体験を戸田は小説『人間革命』で次のように記している。

「十一月中頃の、水のように空が晴れている……ある朝のこと、巖がんさんの題目を唱えている声が独房から洩もれていた。もしも、鉄の扉の前に立つて、朝々、声に聴き入る人があつたら、彼の唱題している声から挑みかかるような烈しさが消えて、静かに澄んできているのに気が付いたであろう。

日夜、苦悶をつづけて、今は疲労のどん底にいるのだが、法華經と取り組んで熱烈に思索し、深く瞑想し、苦悶をつづけることによつて、心の濁りや身体の錆さびが落ちてきたとはいえないであろうか。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……』

東の空へ登つた太陽が独房の窓へ射込んで、牛乳びんの丸い蓋で拵こしらえた数珠じゆずを手に行っている巖さんの額や鼻の辺を琥珀色に染めており、時々陽差しを跳ねて眼鏡が光っている。今年になつて数えはじめた題目は、百八十万遍を越えている。

毎朝と同じように、今朝も彼は大石寺の御本尊を心に念じながら題目を唱えているが、数が進むにつれて、春が降る雪を見るように、しんと心が落ち着いてきて、清々しく、ほのぼのとした楽しさが湧いてきている。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……』

巖さんの心は、今、春の野を吹く微風のように軽く柔らかくて譬えようもなく平和であつた。夢でもない、現でもない……時間にして、数秒であつたか、数分であつたか、それとも数時間であつたか……計りようがなかったが、彼は、数限りない大衆と一緒に虚空にあつて、金色燦爛こんじきさんらんたる大御本尊に向かつて合掌している自分を発見した。

そして、法華經二十八品の内の従地涌出品にある、『是の諸の菩薩、釈迦牟尼仏の所説の音声を聞いて、

下より発来せり。一一の菩薩、皆是れ、大衆の唱導の首なり。各六万恒河沙等の眷属を將いたり。況んや五万、四万、三万、二万、一万恒河沙等の眷属を將いたる者をや。況んやまた、乃至一恒河沙、半恒河沙、四分の一、乃至千万億那由他の一なるをや。況んやまた、千万億那由他の眷属なるをや。況んやまた、億万の眷属なるをや。況んやまた、千万、百万、乃至一万なるをや。況んやまた、一千、一百、乃至一十なるをや。況んやまた、五、四、三、二、一の弟子を將いたる者をや。況んやまた、単己にして、遠離の行を樂えるをや。かくの如き等比、無量無辺にして、算数譬喩も知ること能わざる所なり。この諸の菩薩、地より出で己つて、各虚空の、七宝の妙塔の多宝如来、釈迦牟尼仏の所に詣ず。到り己つて、二世尊に向いたてまつて……』。彼は經文通りの世界にいることを意識している。

巖さんはこの大衆の中の一人であつて、永遠の昔の法華經の会座に連なつていたのであり、大聖人が三大秘法抄で仰せられている『此の三大秘法抄は二千余年の当初・地涌千界の上首として日蓮慥かに教主大覺世尊より口決相承せしなり……』というお言葉が、彼の胸へ彫り込まれてでもいたように、この時、ありありと浮き出してきた。

これは、嘘ではない！ 自分は、今、ここにいるんだ！ 彼は叫ぼうとした時、独房の椅子の上に座っており、朝日は清らかに輝いていた。

巖さんは一瞬茫然となったが、歓喜の波がひたひたと寄せてきて、全身は揉まれ、痺れるような喜びが胸へ衝き上げてきて、両眼から涙が溢れだし、袂を探ってハンカチを取り出して、眼鏡を外して押えても、堰を切ったように涙が湧いてとめどなく、彼は肩を震わせて泣きつづけた。しばらくして、巖さんは椅子を立つて題目を高々と唱えだした。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……』
題目を唱え終わつた刹那、彼の胸の内に叫び声が起こつた。

（おお！ おれは地涌の菩薩ぞ！ 日蓮大聖人が口決相承を受けられた場所に、光栄にも立ち会つたのだぞ！）

巖さんは眼鏡の底の眼を大きく見開き、歓喜に戦く胸を抱き締めて独房の中を歩き廻つていたが、やがて机に帰つて、法華經を開き、從地涌出品を読みなおし、寿量品を読み、囑累品を読みなおした。

（ほう！）

彼は眼鏡の内側で幾度となく瞬いたが、今、眼の前に見る法華經は、昨日まで汗を絞つても解けなかつた難解の法華經なのに、手の内の玉を見るように易々と読め、的確に意味が汲み取れる。それは遠い昔に教わつた法華經が憶い出されてきたような、不思議さを覚えながらも感謝の想いで胸がいつぱいになった。

（よし！ ぼくの一生は決まった！ この尊い法華經を流布して、生涯を終わるのだ！）

中国の聖人孔子は四十にして惑わず、五十にして天命を知るといったとか。彼はうん！ とうなって立ち上がった。そして部屋の中を歩きつ戻りつしながら叫んだのであった。『彼に遅ること五年にして惑わず、彼に先立つこと五年にして天命を知る』。時に彼の年は四十五歳であった」（『戸田城聖全集』第八卷五一六頁）。

地涌の菩薩とは、法華經從地涌出品第十五で大地の底から湧現したと説かれる無数の大菩薩のことである。法華經の虚空会において、地涌の菩薩は、他の九界の衆生とともに虚空に浮かんで釈迦・多宝の二仏に向かつて礼拝している。この虚空会の儀式は、仏が悟った永遠の真理の世界を象徴的に表現したものであり、神力品第二十一では釈尊から地涌の菩薩の上首である上行菩薩に対して釈尊滅後における妙法弘通の使命が付囑される。日蓮はこの上行菩薩の再誕と位置付けられている。日蓮が図顕した曼荼羅本尊はこの虚空会の儀式を用いて顕されている。

先の「仏とは生命なり」との悟達は、仏教をどのような宗教として認識するかという思想的な問題に関するものであったのに対し、「我、地涌の菩薩なり」との悟達は、自身がこの世に存在することの意味を覚知するという実存的

な問題に関わるものである。戸田は、自身が地涌の菩薩の一人として法華經に説かれる虚空会の儀式に連なっていることを感得することによって、自身がこの世に存在している意味、すなわち今世における使命が南無妙法蓮華經を現実世界に流布していくことにあることを自覚したのである。

戸田の出獄後の一切の闘争は、この時に得た深遠な宗教的使命感から生まれたものであった。彼は、地涌の菩薩としての使命を自覚していくことを会員に対して繰り返し説いた。その結果、地涌の使命の自覚は、急速に戦後の学会員に浸透していった。戦前の創価教育学会と戦後の創価学会の相違点はいくつも挙げられるが、その相違点の一つとして、会員全体に地涌の菩薩としての明確な宗教的使命感が確立されたことを挙げることができよう。創価学会は、戸田の獄中の開悟を軸にして一段と強靱な運動体へと飛躍していった。彼の悟達が創価学会の「原点」とされる所以である。

昭和二十（一九四五）年一月八日、戸田は突然、予審判事（当時の刑事訴訟法において公判前の取り調べを担当した裁判官のこと）から牧口の死を知らされた。その時の衝撃は戸田にとってまことに大きなものがあつた。

翌年の十一月十七日、戸田は牧口の三回忌法要の挨拶で牧口の死に触れ、次のように述べている。

日蓮大聖人の御書の偽書説に対しての須田氏の論述です。

三大秘法抄の写本発見は須田氏の見解通りです。

が失われるような災厄にたまたま遭わなかったという僥倖^{ぎやうじやう}による。真筆^{まひつ}が現存しない御書を全面的に排除するということは、不幸にして真筆滅失の災厄に遭った御書をも全て切り捨てることに他ならない。

真筆あるいは古写本が現存（または曾存）するものだけをを用いるという在り方は、日蓮の思想を考えるための根拠をサイコロの目のような偶然に委ねることになる。

真偽未定の御書で、かつては偽書の疑いが強いとされていたものでも、後に真筆や古写本が発見された例もある。『諸人御返事』（一二八四頁）はその例である。同抄は録外に属するので、偽書の疑いが強く掛けられていたが、真筆三紙が完全な形で大正時代に発見された（千葉・本土寺蔵）。同抄に限らず、『内記左近入道殿御返事』など、近年になって真筆や古写本が発見される例は少なくない。このような例もあるので、現時点で真筆が存在しない御書をそれだけの理由で偽書と言い切ることはできない。

また、かつて偽書説が強く言われていた御書でも、従来とは全く異なる角度から検討した結果、逆に真書の可能性が高いとの判断が出た例もある。その典型が『三大秘法抄』である。同抄は真筆がないために、古来、真偽の議論が盛んになされてきたが、近年、計量文献学の研究をもとに同抄の用語などをコンピュータで解析した結

果、真書の可能性が高いとの結論が出た（伊藤瑞毅『いまなぜ三大秘法抄か』）。

計量文献学だけでなく、将来にはそれまでの発想では考えられない新しい観点から検証されていく可能性も大いにありうるだろう。

このように、真偽の判断も決して確定したものではなく流動的であり、現在、偽書の疑いが濃いとされているものでも一転して真書と見なされることもありうる事態である。このように考えてくると、真偽未定の御書を一律に排除する在り方は多くの真書を切り捨てる恐れが大きく、厳密なように見えて真偽に余りにもこだわり過ぎており、行き過ぎと言うべきであろう。

真偽未定の御書を全面的に排除する在り方について勝呂信静^{すぐろしんじやう}博士は『日蓮聖人の宗教思想を实態よりも狭小に限定することになりかねないと思う。それは偏った日蓮像を作りあげることにもなるであろう』（『御遺文の真偽問題』）と述べている。博士の意見に同意したい（同書一七七頁）

4.「教学要綱」が池田先生の「**法華經 方便品・寿量品講義**」と「**法華經の智慧**」を紹介、引用にも拘らず、その内容は先生のこれらの**玉稿**の本義と全く乖離、違背することを示す。

再度の揭示ですが、「教学要綱」55～56頁には—池田先生は、一九九五年五月から、機関紙「聖教新聞」紙上で「**法華經 方便品・寿量品講義**」の連載を行い、さらに同年、機関誌「大白蓮華」二月号から、「**法華經の智慧—二十一世紀の宗教を語る**」と題する長期連載を行った。—とあります。

私は、「教学要綱」が池田先生の**玉稿**「**法華經の智慧**」を紹介、引用するからには、その論述すべてにおいて、先生の「**法華經の智慧**」の本意に一分たりとも違うことがあってはならない、そして紹介する以上、先生が「**法華經の智慧**」で明かされた文底からの真義—**日蓮大聖人即御本尊**、また、**人法一箇**、さらに、何十箇所でご指導の**久遠元初自受用身如来**について論じなければならぬと確信しています。しかし、「教学要綱」の実態は偉大な「**法華經の智慧**」の名を借りた狡猾な自己正当化の作為そのものである！と断じます。以下、それを論証します。

「**法華經 方便品・寿量品講義**」(池田大作全集第35巻)には—

小題「久遠元初とは”生命根源の時”」のところで—**大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華經であり、御自身が南無妙法蓮華經如来であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて、末法は一切の人々に与えてくださったのです。**(中略)

「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、十界常住の南無妙法蓮華經の御本尊です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わっている御本尊が現れ、その功德が開かれてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別してそして、「**久遠元初**」とも言うのです。

「**久遠元初**」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すというだけではありません。その本義から言えば、久遠元初とは、いわば“生命の根源の時”です。この生命の根源に目覚めれば、三世にわたっていつでも「**久遠元初**」—となるのです。

小題“久遠を思い出せば娑婆世界も晴れ晴れ輝く”」のところで—この生命の根源の時に立ち返って、“今から”と新鮮な一念で現実へと向かっていく久遠元初のいき方が、大聖人の仏法の真髄なのです。

御本尊を信受し勤行・唱題を実践する私どもにとっては、「一日一日が久遠元初」「一瞬一瞬が久遠元初」なのです。（中略）大聖人の御内証の本地—それは、久遠元初の自受用身であられる。自受用身とは“ほしいままにうちもちいるみ”（御書 759 頁）です—と。

しかし、「教学要綱」には—日蓮大聖人は、末法の衆生の救済を釈尊に代わって行う「末法の教主」（47 頁）、

日蓮大聖人が、末法の衆生が成仏するための教えを探究し、『法華経』の肝心として「南無妙法蓮華経」を選び取っていかれた（68 頁）—と。

（私見）私たちは、池田先生の「法華経 方便品・寿量品講義」の上記、—日蓮大聖人が久遠元初の自受用身であり、御自身が南無妙法蓮華経如来であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて、末法の一切の人々に与えてくださったのです。—を、生命に染め、日々、勤行・唱題することが、私どもにとっての久遠元初なのです！私たちは一瞬一瞬が久遠元初なのです！

それなのに、上記「教学要綱」の大聖人様への言い渡しは許せない！こんな表現を、三代会長から拝したことはない！「教学要綱」は、池田先生の「法華経 方便品・寿量品講義」を何と心得るのか！即刻、池田先生にお詫びし、「教学要綱」を絶版にせよ！

また、私は、以下の論述こそ「法華経の智慧」の本意と拝しています。
如来神力品（第二十一章）「文底」仏法は「民衆」仏法 具騰本種には
—（池田大作全集第 29-31 巻）

「文底」が説かれて仏法は完結

齊藤 前項で、仏教の歴史を「仏因の探求」という観点から語っていただきましたが、その探求の究極が「寿量品の文底」にあるという結論になります。ここまで至らないと、「生きとし生けるものを仏にしたい」という釈尊の願いも完結しません。

池田 寿量文底の「仏因」とは、言うまでもなく無始無終の妙法であり、南無妙法蓮華經です。これは「仏因」であると同時に「仏果」です。「因果俱時・不思議の一法」です。これを寿量品の説法を聞いて覚知したのです。寿量品を、虚空会上の「三十二相の、きらびやかな釈尊の話」と思ったら間違いです。その色相莊嚴の仏を見上げているだけなら、所詮は「他人ごと」になってしまふ。そうではなく、五百塵点劫の説法で、どんどん過去にさかのぼっていったあげく、自分の究極の「原点」は、釈尊の「原点」と同じであったと分かったのです。「虚空」を見上げていて、はっと「足もと」に気づいたのです。これが「等覺一転名字妙覺」です。（成仏の本因が南無妙法蓮華經如来であることを述べた文。等覺という最高位の菩薩でも、久遠元初の妙法を覚知して、「等覺」から一転して「名字即」という凡夫の位になり、そこから直ちに仏の位である「妙覺」になること）

須田 一段一段、成仏を目指して階段を上った果てに、じつは「出発点」に戻った。自分を生み、支えている宇宙生命そのものを自覚したということになります 遠藤 「具騰本種」というのも同じ意味ですね。（「具つぶさに本種を騰あぐ」と読む。妙楽大師の言葉。成仏の根本原因＝本種は、寿量品の文底に蔵されており、この本種を覚知したがゆえに法華經の会座の衆生も、成仏したとする） 齊藤 その「本種」が「南無妙法蓮華經」である。それを目覚めた。

池田 文上を聞いただけで文底がわかった。そういう機根の衆生は、それでいい。しかし、わからない機根の衆生は、どうするのか。これが「滅後の弘教を上行菩薩に託した」理由です。上行菩薩という「菩薩仏」――すなわち「因果俱時・不思議の一法」を、その身に体現している人が、「因果俱時・不思議の一法」を弘めるのです。仏法では必ず「説かれる法」と「説く人」が一致しているのです。

齊藤 「法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」ともあります。（中国・唐時代の天台僧・道暹の『法華文句輔正記』の言葉。大聖人も観心本尊抄〈御書二五〇ページ〉などで引用されている）

池田 日蓮大聖人は「本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり」と仰せです。末法の機根の衆生には、まっすぐに、そのまま、成仏の「本因」を、久遠元初の妙法を説くのです。そのための如来神力品の付嘱です。ゆえに如来神力の「如来」の元意は、釈尊だけのことではなく「一切衆生」のことになる。「神力」とは「生命の力」です。 29/34

凡夫を代表とする「一切衆生」の本当の「生命の力」を示したのが如来神力品なのです。それを示すために、全宇宙的儀式の「十神力」が説かれた。

遠藤 三十二相の「色相莊嚴の仏」は、そのことに気づかせるための「仮の仏（権仏）」だということですね。

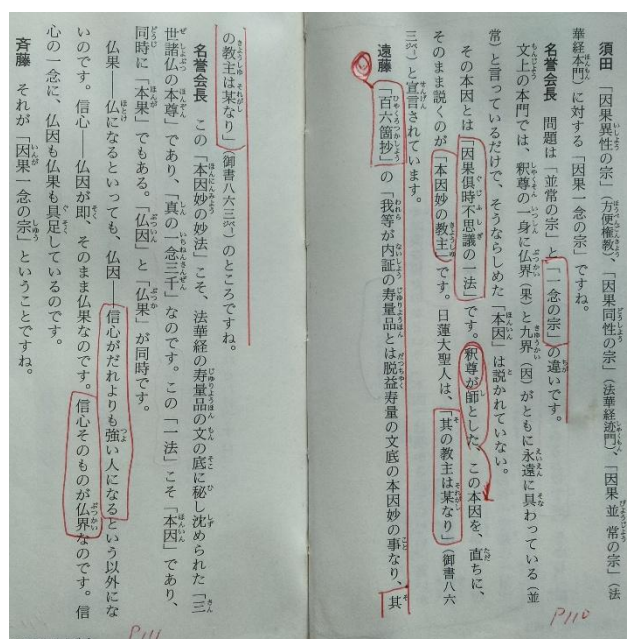
また、如来寿量品（第十六章）発迹顕本——「人間こそ尊極」...(池田大作全集第29-31巻)——には 釈尊の師は南無妙法蓮華經如来

池田 法と人（仏）は本来、不可分なのです。「如来」というのも「如（真如・真実の世界）からやって来たもの」ということです。すなわち「如来」とは、真実の「法」が現実の上に表れたのです。宇宙生命に"人"の側面と"法"の側面があり、それが一体なのです。少しむずかしいかもしれないが、大事なところなので、もう少し言っておこう。釈尊の説法に「法を見る者は我を見る、我を見る者は法を見る」（相応部經典（犍度篇）「長老品・跋迦梨」）という言葉がある。法を体得すれば釈尊に会うことができ、釈尊に会えば法を悟れるという意味です。「我を見る」の「我」とは、根本的には「永遠の法」と一体となった「永遠の仏」です。寿量品では、永遠なる「常住此説法（常に此に住して法を説く）」（法華經四八九ページ）の仏身を説く。文上の法華經では、五百塵点劫以来の「久遠実成の釈尊」のことだが、その指向しているのは無始無終の「久遠元初の仏」です。釈尊が悟った「永遠の法」即「永遠の仏」は、あらゆる仏が悟った「永遠の大生命」であった。過去・現在・未来のあらゆる仏は、ことごとく釈尊と同じく「久遠元初の仏」を師として悟ったのです。それが

久遠元初の自受用身であり南無妙法蓮華經如来です。戸田先生は言われた。「日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのです。これを久遠元初といいます。始めもなければ、終わりもないのです。大宇宙それ自体が、大生命体なのです」と。無始無終で慈悲の活動を続ける、その大生命体を「師」として、「人間・釈尊」は人間のまま仏となったのです。そして、悟ったとたん、三世十方の諸仏は皆、この人法一箇の「永遠の仏」を師として仏になったのだとわかったのですと。

（私見）結論、上記のご指導こそが池田先生のご指導の真髄なのです！「教学要綱」は「法華經の智慧」に完全に違背なのです！よって「教学要綱」は絶版にしなければならないのです！

5. 池田先生は、以下「法華經の智慧」で御相伝「**本因妙抄**」「**百六箇抄**」をもって日蓮仏法の真義をご指導されています。しかし「教学要綱」はその日蓮本仏論を無視し—**大聖人は自身を「如来の使い」「教主釈尊の御使い」と位置づけ、「教主釈尊の勅宣を頂戴して」『法華經』を説いている**（45頁）—の暴言なのです。その実態は「教学要綱」5頁、発刊に当たっての—**三代会長の指導のままに、「実践の教学」の大道を貫いていきます**—に全く自語相違です。



「法華經の智慧」第四卷 110、111 頁で**名誉会長**は一本因とは「因果俱時不思議の一法」です。釈尊が師とした、この本因を、直ちに、そのまま説くのが「**本因妙の教主**」です。日蓮大聖人は、「**其の教主は某なり**」と宣言されています。

遠藤 「**百六箇抄**」の「**我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり**」のところです。

名誉会長 この「本因妙の妙法」こそ、法華經の寿量品の**文の底に秘し沈められた「三世諸仏の本尊」であり「真の一念三千」**なのです。この「一法」こそ「本因」であり同時に「本果」でもある。「仏因」と「仏果」が同時です—と。すなわち、**先生は文底から拝しなさいとご指導**なのです。

上記、須田氏の一「因果異性の宗」（方便権教）、「因果同性の宗」（法華經迹門）、「因果並常の宗」（法華經本門）に対する「因果一念の宗」ですね—は「**本因妙抄**」の文です。

（**私見**）上記、池田先生のご指導だけで、「**教学要綱**」は**完全な邪義と断定されるのです！**「教学要綱」はただの**浅薄な文上解釈！時代錯誤の釈迦仏法**なのです。

6. 更なる論考

以上、本拙文の一人本尊を明かす「**三大秘法抄**」の写本発見で「**教学要綱**」の邪義が再確定への論述は終え、続いて、以下、「**教学要綱**」の邪義を再揭示し、大聖人を「教主釈尊の御使い」と貶めることに対し破邪顕正します。

『法華經』には、現実には亡くなった歴史上の釈尊と、「永遠の仏」としての釈尊の関係が示されている（28頁）

大聖人は自身を「如来の使い」「教主釈尊の御使い」と位置づけ、「教主釈尊の勅宣を頂戴して」『法華經』を説いている（45頁）

日蓮大聖人は末法の衆生の救済を釈尊に代わって行う「末法の教主」（47頁）

日蓮大聖人が、末法の衆生が成仏するための教えを探究し、『法華經』の肝心として「南無妙法蓮華經」を選び取っていかれた（68頁）

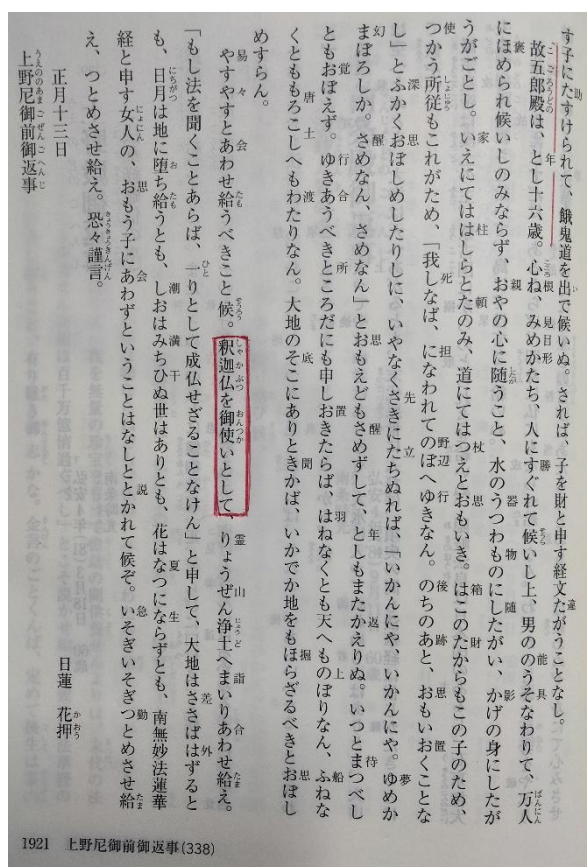
大聖人御自身が竜の口の法難を契機に、釈尊から「南無妙法蓮華經」を付嘱された上行菩薩の使命に立ち、自らその「南無妙法蓮華經」を覚知したという究極的な自覚に到達されたことを意味する。そして、竜の口の法難以降、大聖人は、その自覚の上から文字曼荼羅を顕されていったのである。（76頁）

大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は『法華經』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である。さらに、その「寿量の仏」そのものが、首題の「南無妙法蓮華經」の脇士に位置づけられている（78頁）

如来神力品第二十一において釈尊は上行菩薩等の地涌の菩薩に付嘱を行うが、日蓮大聖人がその付嘱の法こそ「南無妙法蓮華經」であると覚知された（中略）大聖人が、その「南無妙法蓮華經」を具体的に三大秘法として示し、末法の衆生の成仏のための修行方法を確立して、それを弘通したことは、地涌の菩薩の先頭に立つ上行菩薩としての使命を果たされたものである（92頁）とあります。

（**私見**）上記、7つの邪義の根底にあるのが一大聖人を「教主釈尊の御使い」と貶めることであり、その誤りを以下、御書と池田先生の「**法華經の智慧**」のご指導により破邪顕正します。 32/34

「上野尼御前御返事」には「釈迦仏を御使いとして、りょうぜん浄土へまいりあわせ給え」（旧版 1576 頁、新版 1921 頁）とあり、この御書は真筆が大石寺に現存しており、疑いの余地はありません。要するに、日蓮大聖人および大聖人門下からすれば釈迦仏は「使い」に過ぎないのです！それが大聖人の御認識であつたことが明らかです。大聖人を釈迦仏の使いとする『教学要綱』の主張が、大聖人の御内証とは全く正反対であることがこの御文一つとってもはっきりしています。『教学要綱』が大聖人を「上行菩薩の再誕どまり」にしていることが、いかに明白な誤りであるかが、大聖人のこの御文で確定です。



池田先生は 2006.2.20 のスピーチ（池田大作全集第 100 巻）で、以下ご指導です。—

時光の父が逝去して十五年後、今度は、時光の弟の七郎五郎が、十六歳の若さで、急逝した。大聖人も、その成長を心から期待されていた、頼もしい好青年であった。母の悲しみと嘆きは、あまりにも深かった。

大聖人は、その母の心の奥深くに希望の光を灯されるように、こう教え励まされたのである。「(亡くなられたご息に) やすやすと、お会いになる方法があるのです。釈迦仏を御使いとして、靈山浄土へまいり、会われるがよいでしょう。」

（法華經方便品第二に）『若し法を聞く者あらば、一人として成仏せずということ無けん』と言って、大地をさして外れる

ことがあっても、日月は地に落ちられても、潮の干満がなくなる時代はあっても、花は夏に実にならなくても、南無妙法蓮華經と唱える女性が、愛しく思う子に会えないということはない、と説かれているのです」（御書 1576 頁、通解）—と。

（私見）池田先生の上記ご指導—方法があるのです。釈迦仏を御使いとして—より、日蓮大聖人が方法論として、釈迦仏を御使いとされたのです！ゆえに、『教学要綱』が大聖人を「上行菩薩の再誕どまり」に貶めるのは、あまりにも酷い邪義、大謗法なのです！

そして、「**法華經の智慧**」如来神力品（第二十一章）（池田大作全集第 29-31 卷）には一 地涌の菩薩一境涯は仏、行動は菩薩 「地涌の菩薩」とは、内証の境涯が「仏」と同じでありながら、しかも、どこまでも「菩薩」として行動していくからです。いわば「**菩薩仏**」です。境涯が「仏」と師弟不二でなければ、正法を正しく弘めることはできない。（中略）上行菩薩への結要付属一**上行菩薩は「菩薩仏」** 通常、「菩薩」と言えば、成仏を目指して修行している存在です。しかし、明らかに「上行菩薩」は、そうではない。「如来のすべて」を全身に体していて、なおかつ「菩薩」と呼ばれている。**上行菩薩は「菩薩仏」**なのです。（中略）

百六箇抄には、こう仰せだ。（「**本門付属の本迹**」）「**久遠名字の時・受る所の妙法は本・上行等は迹なり、久遠元初の結要付嘱は日蓮今日寿量の付属と同意なり**」むずかしいが、要するに、**久遠以来、名字即の凡夫のまま日蓮大聖人が南無妙法蓮華經の本法を所持しておられる。それが「本」**。それから見れば、法華經の經文上の上行菩薩等の儀式は「迹」になる。經文は、大聖人が事実として妙法を広宣流布されるための「予証（あらかじめ出す証拠）」であり「文証」です。**「南無妙法蓮華經如来」が、法華經二十八品というスクリーンに「影」を映した結果、久遠実成の釈尊（仏界）や上行菩薩（九界）の姿になった**のです。だから、どこまでも妙法が「本」、上行菩薩は「迹」です。一と。

（**私見**）上記より、**日蓮大聖人を「教主釈尊の御使い」と貶める「教学要綱」**は、**池田先生が「法華經の智慧」**でのみご教示の、日蓮大聖人のご内証は一「**菩薩仏**」の上行菩薩一の深義を全く無視なのです！

ゆえに、「教学要綱」は即刻、絶版にすべきである！と、私は断言します。この拙文を親しき友人にもお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご高見、ご指導を kiroi bara.526@gmail.com に、お願い申し上げます。

敬具 図斉修